

常州鯉洲村 天狗争乱時

坂田家の悲劇

稲田秀男

常州鯉淵村 天狗争乱時

稲田秀男

坂田家の悲劇

鯉淵村（現東茨城郡 内原町 鯉淵）坂田家は村で屈指の有力者であり、又資産家でもあった。史料によると「大目付格郷士食禄五〇石を賜る」とある。

天狗争乱時、鯉淵地方は四十五ヶ村が連合して自警団を組織し、浮浪の徒に対抗して村の治安を守っていた。世に言われる鯉淵農兵隊である。最終的には水戸藩門閥派に租入られて天狗追討の一翼を担った。当然村の有力者は諸生派である。

坂田家の系譜によると、坂田兄弟の親である坂田莊三郎も諸生派で、物質的に同派に援助をしていた。

乍恐以書付奉申上候

一 鯉淵村久五郎所持之田畠同日出奔行衛不相分候二付是迄組内ニ而作付置候処村役人之指出ニ相成居候由之處

尤久五郎妻子之儀ハ久五郎行衛相分り御所置ニ相成候迄ハ親類幸介方へ引取小屋掛出来指置候様田畠之儀ハ妻子へ引渡為作付候様御判談ニ相成其旨相心得……

「以下略」

寅十月九日

平戸嘉平

指出

金沢藤之介様

杉浦吉十郎様

慶応二年頃は諸生派の天下で、資料にある市毛久五郎は天狗派だったので村に居られず、家族を残して失踪してしまった。

一時平潟辺の網元に潜居していたようである。資料はその時に村役人が藩に届けた文書で、市毛家の親類が耕作を肩代りしたことが記されている。慶応四年三月、王政復古、一陽来福。久五郎の天狗派の天下となり、彼は晴れて大手を振って鯉淵に戻って来た。

慶応四年六月二十三日暴風雨の夜、同志（同

の一人は千葉常四郎である」と相計り荘三郎を刺殺する。

まず厚木付近の豪農に軍資金を命じ、守りの手薄な山中藩陣屋を襲撃して、武器、弾薬、米などを奪い取った。翌日は人夫を含めて三百人近くとなり、一時は小田原に出撃する勢いを示したが、小田原藩の出兵を聞くや直ちに江戸に引き上げる体制に入った。撤収の段階で、動員した人足、人夫に金や陣屋からの捕獲物を分与して帰村させているが、同志たちは、村方の困窮人名簿を提出させ、前にのべた豪農層から徴収した資金の一部を施した。

関東の三拳兵で、拳兵組の中では一番被害が少なく、他の流出山拳兵組、甲府城攻略組は惨敗となった。

十二月二十五日、幕府の藩邸焼打事件で、鯉淵四郎は逃れて京都に行ったが、以後の維新資料の中には鯉淵四郎の名は見えない。鯉淵四郎は明治二年九月二十八日、土浦付近で死亡している。

当家の方は殺されたと言っているが、真相は語ってくれなかった。

一方、弟の彦五郎は京都で志士達と交わっていたが、片時も父と兄の敵のことを忘れなかった。剣術に専念し腕に自身がつくと同志を連れて郷里の鯉淵に急いで帰郷。夜陰にまぎれて宿敵市毛久五郎と千葉常次郎の二人の家に心び入り見事に仇を討つと、その晩に鯉淵を去ったという。明治二年十一月十四日、彦五郎二十四才の時である。

因みに討たれた二人の墓石は向古屋共同墓地と鯉淵小学校前の共同墓地に建立されており、死亡年月日は同年同日に刻まれている。仇討禁止令が発令されたのが明治六年であるから四年前の出来事である。

口伝によると、当夜の千葉常次郎は夜着を着て居り、夫人が夜着をかぶせたので手の指を切り落とされ、さらに短筒で撃たれ、息絶えたという。当時の住居は現在の鯉淵郵便局前に在り、博徒相手に茶店を営んでいたとのことである。子孫は現在千葉方面に住んでいるとの由である。

また、市毛久五郎は千葉常次郎と同様博徒で、近隣ではなかなか巾をきかせていた様だが子孫は現在絶えている。

以後坂田彦五郎は新政府に対し、自由民権的な抵抗をして九州に逃れ、寺に寄留したその娘（後の大日本愛国婦人会の創始者奥村五百子女史）と相愛の仲となり、寺の反対を押し切って結婚新生活に入った。

明治六年に長女敏子が生まれた。苦しい生活の中で五百子がいつも心に懸かっていたのは戸籍の問題であった。明治四年七月十四日の廃藩置県令により、武士、町民、百姓の身分差別が無くなり、無籍者は早く届けを出さねばならなくなっていた。五百子は二番目の子供を身ごもると、このままだと長女の敏子も新しく生まれてくる子供も父親の居ない子供になってしまうと気が気でなかった。そこで彦五郎の籍を賣つてこようと夫を説き伏せ、家財一切を売り払つて路用を作り、唐津から鯉淵村へと向かった。身重な体での四百里の道のりはきびしく、親子三人は食べる物まで儉約してやっと鯉淵にたどり着いた。しかし坂田家の人々の彼女を見る目は冷たかった。

親族会議が開かれたが、

「素性のわからぬ女の婿にやるのは坂田家の家名の恥だ」という親族もいた。

隣の部屋でそれを聞いていた五百子はいきなりその席に飛び込んで来て、

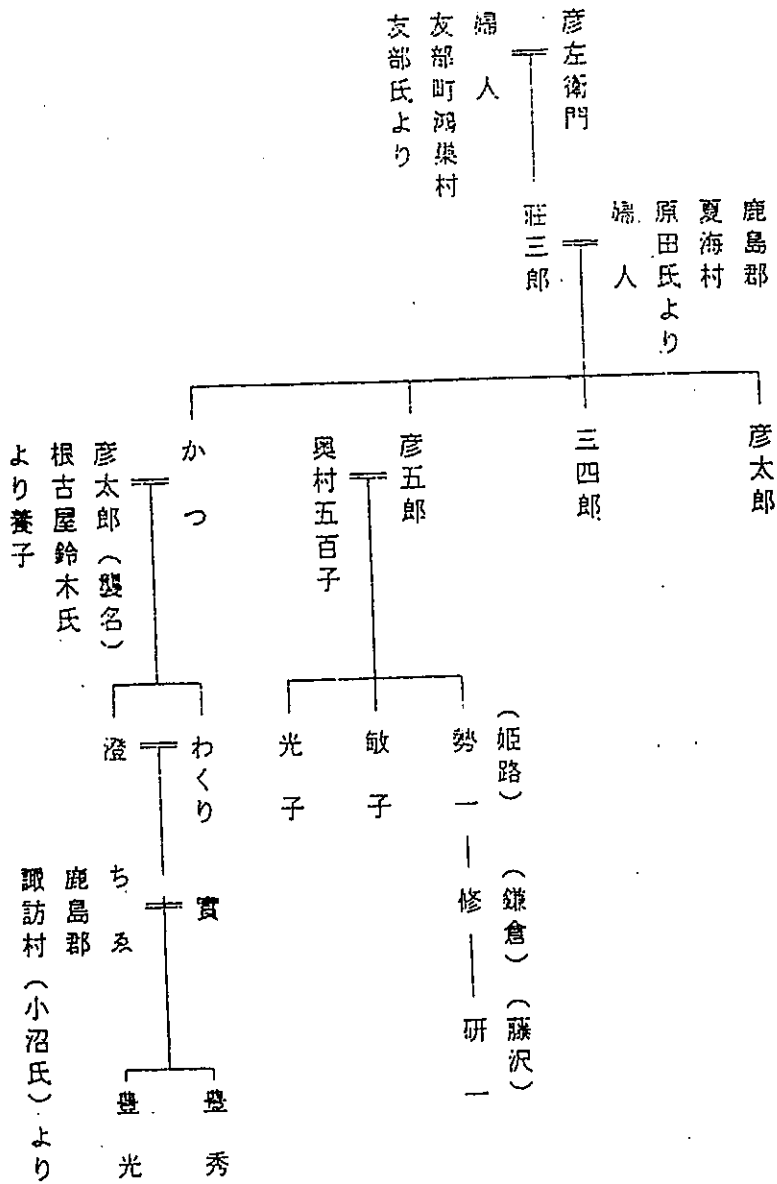
「私は奥村五百子です。私のことを素性もわからない者と考えているようですが、これは奥村家を恥ずかしめられるもので黙っていられません。私の父は二条治孝の子で公卿の出身です。」と一座を見まわし、
「是非とも籍を頂かねばここを一步も退きません。」とふくらんだ腹を波うたせて構えたという。

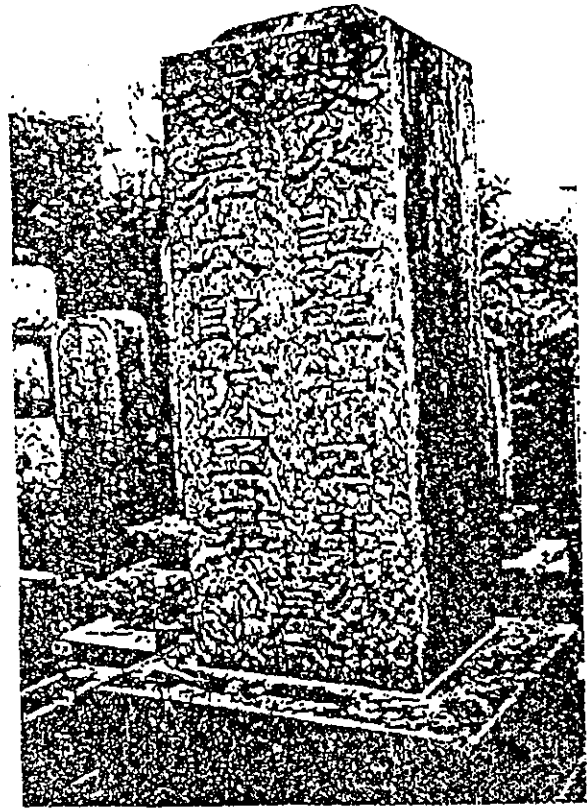
坂田家の親族一同は、彼女のその勢いにのまれて入籍を承諾したというエピソードが鯉淵地方に伝わっている。

五百子は次女光子を鯉淵で生み、一家四人で唐津に帰って行った。その時、坂田家では彦五郎達に、路銀及び当座の費用にと親族一同で何がしの金を出し合つて手渡したという伝えもある。明治九年のことである。

彦五郎については後日談がある。

坂田彦五郎系譜





坂田家の墓石の裏面に、

「慶応四年六月二十三日暴雨夕凶賊匪徒ノ毒刃ノタメ三十九才ニテ死ス 水戸藩士名ハ 往三郎ト稱ス」と刻まれてある。

長男彦太郎は祖母の実家（友部町の庄介方）に逃れて隠れていたが、天狗党の知る所となり現友部町県立中央病院近くの並木付近で殺された。親子共に凶刃に倒れたのである。

当時、坂田三四郎と彦五郎は共に京都に滞在していたといわれているが、資料では京都で兄弟が会った記録はない。

兄の坂田三四郎は鯉淵四郎と変名して、相楽給三等と倒幕運動に携わっていた。

慶応三年十二月十五日、幕府の勢力を分散して倒幕を容易にする為、江戸の薩摩屋敷で関東各地で挙兵を計画。

一、野州出流山拳兵組

一、甲府城攻略組

一、相州萩野山中陣屋襲撃組

隊長 鯉淵四郎（二八才・水戸・坂田三四郎）

谷 竜夫（三三才・鈴木佐吉）

長山真一郎（二七才・上州錦織郡綿打村）

岩屋鬼三郎（秋田脱藩・古世蔵人）

結城四郎（出羽最上・最上司）

川上 司（江戸の人）

相州萩野山組の一隊の鯉淵四郎は隊長として参加

している。当日薩摩屋敷から参加したのが六人である*

* ったが、途中同志が増えて三十七、八人となった。

唐津に帰ってから夫婦は商売（古着や）をはじめた。主に五百子の努力で面白いほど繁盛し、彦五郎夫妻の手許にはかなりの貯えが出来たとのことである。

明治十年西南の役勃発。時の新政府に不満の彦五郎は、

「いよいよ立つべき時が来た。今の政府は腰抜けだ。こんな政府に日本は任せられるか。自分は西郷さんに加担する。」と言ひ、先ず唐津で事を起こすことが西郷を助けるのに最も得策であると同志を募つた。

以外に多くの人が集まつた。しかしそれは、維新の改革で職を失つた人や、榮達に遅れた浪人で、半ば喰いつめた者が、不満の吐け口を求めて集まつた者が多かつた。

彦五郎夫妻は半ば計画が成就したかのように、誰でも西郷の支持者であると思ひ込むようになっていた。

しかし、五百子の兄円心（高德寺住職）は彦五郎夫婦の見方と異なっていた。

「私はこの寺の相続人である。私の時代にこの由緒ある寺は潰せない。」

と言つて彦五郎夫婦の行動を妄動だと決め付けた。

また一方で、彦五郎達が兵を挙げる為に用意した火薬や武器等は、権令（県知事）の知るところとなり、権令に「自分も西郷と兵を挙げるのだから」と騙されてとりあげられ、彦五郎の計画はあつけなく崩れた。

西郷隆盛が敗れて城山で自殺したと聞いてから、彦五郎は一室に閉じこもり、読書をしたり、書画に耽つてばかり居るようになった。夫婦仲は日増しに悪くなり、明治二十年、子供三人を引取つて五百子は彦五郎と離別する。

明治三十四年、五百子は愛国婦人会を創立する。明治四十年、京都大学病院で死亡、六十四才。

一方彦五郎は放浪の末、姫路の連隊長の三男に嫁いだ孫のあさが引取つて世話をし、大正八年、七十四才で姫路で死す。

坂田家の莊三郎、彦太郎、三四郎、彦五郎一家四人は波乱に富んだ一生であつた。